

スーザン・ソントグの批評における美と倫理

柴田健志

はじめに

ソントグの批評には一貫したスタイルがある。小説や映画等の芸術作品を論じる際、それらの作品の意味を解説するというスタイルをソントグは採用していないのだ。批評の役割は読者に向かって作品の意味を解き明かすことにあるとすれば、そういう役割をはじめから拒否している。

「反解釈」というスタイルだ。ソントグによれば、批評には二種類のものがある。そのひとつが「反解釈」なのだ。まさしく『反解釈』と題された1964年のテキストでソントグは次のように述べる。

「必要とされているのは、規範的 (prescriptive) 語彙というよりも作品に対する記述的 (descriptive) 語彙である」(Sontag 2013:18)。

二種類の批評のスタイルが語呂合わせを用いて巧みに表現されている。何らかの基準に照らして芸術作品の価値を判定する(規範的)のではなく、むしろ芸術作品が事実として何であるかを示す(記述的)こと、それが「反解釈」が標榜する方法なのだ。ソントグはこの『反解釈』というテキストを次のようにまとめている。

「批評の機能は作品が何を意味するかを示すことではなく、作品が作品であるのはいかにしてなのかを示すことであり、さらにいえば作品が作品であることを示すことにある」(Sontag 2013:20)。

では、このような批評のスタイルは、ソントグにとっていったいどんな意味をもっているのだろうか。筆者の考えによれば、「反解釈」というスタイルは批評を倫理的な行為として実践するというソントグの意志の表明として理解することができる。ソントグによれば、批評は美という領域に関わるが、美の領域と倫理の領域は分離できない。いや、それらを分離することは間違いであるという。批評は美に関わることで同時に倫理に関わる行為として考えられているのだ。ではなぜ美と倫理は分離できないのか。この問いかけに答えることが重要である。ソントグにとっては、個々人が優れた人間になることが倫理の問題だった。美が倫理と結びつく理由は、美が人間を優れたものにすると考えられるからである。そうであれば、いかなる意味でそのように考えられるのかという点が重要な問題になるだろう。この問題を中心にして、ソントグの批評のスタイルの意味を考察したのが以下の論考である。なお、以下において「倫理」と「道徳」を文脈によって使い分けるが、これらは同じ意味である。

1 道徳

ソントグにとって、道徳とはいかにして善き生を生きるか、いかにしてより優れた人間となりうるかという問題だった。例えば、ソントグの

短編小説集『わたしエトセトラ』に収録されている『過去の不満を顧みて』の語り手はこんなことをいう。

「尽くすこと、社会と最高の理想の役に立つことは、これまでずっと、この生を生きるに価するものにするのだとわたしには思われた」(Sontag 2018:155)。

『わたしエトセトラ』の自伝的構成からすれば、この言葉をソントグ自身のものとして読むことができるだろう。また、この本の主題について、ソントグは『ローリングストーン』誌のインタヴューのなかで次のようなことを語っている。

「それは自己超越の探求であり、それまでとは違う、あるいはそれまでより優れた、あるいはより気高い、あるいは道徳的な人物になろうという取り組み」(Sontag 2014:98)。

これはもちろん小説というフィクションの主題である。しかし、そこにソントグ自身の生の主題が反映されていると考えても間違いではないだろう。この考えをもとにすると、次のような重要な点が指摘できる。ソントグにとって、道徳とは一般的な規範に従って判断し行為することではない。そのような意味での道徳とは異なった道徳のことを考えているのだ。道徳とはむしろ自己自身が「道徳的な人物になろうという取り組み」なのだ。では、それはいったい何のための「取り組み」なのだろうか。いうまでもなく、「この生を生きるに価するものにする」ことが

その目的として考えられるだろう。事実、1965年の『様式について』というテキストでソントグはこの点を鮮明に述べているのだ。

「道徳とは、われわれすべてにとって、生をより人間らしく、より生き甲斐のあるものにするものである。あるいはそのようなのだとみなされてる」(Sontag 2013:34)。

このように主張する点において、ソントグは『モダン・モラル・フィロソフィー』のアンスコムの立場と偶然にも軌を一にする。アンスコムは義務論であれ功利主義であれ、個人を一般的な規範に従わせるようなタイプの道徳は「廃棄されるべきである」(Anscombe 1958:1)と述べているからだ。このようなタイプの道徳に対比されるのは、いうまでもなくアリストテレスの倫理学である。

アリストテレスによれば、善き生を生きるにはよき性格を身につけることが要求される。アリストテレスはそれを「倫理的卓越性」つまり「徳」と呼ぶ。しかし、人間が身につけるべき様々な「徳」は、生まれつき人間に備わっていないため、「習慣づけ」される必要がある。アリストテレスの倫理学では個々の文脈において適切な「選択」を行なうことが重視されているが、「選択」は行為の規範から導かれるのではない。「徳」によってなされるべきものとして考えられているのだ。つねに適切な行為が「選択」できるよう習慣化されて身についた「性向(ヘクシス)」が「徳」と呼ばれる。また、悪しき「情念」を制御することも「徳」の役目である。それゆえ「徳」は「行為(プラクシス)」と情念(パトス)」に関連するものなのだ。ソントグにおいてもまさにこの点が問題になっ

ている。

「『道徳』が意味するのは、習慣化された、あるいは慢性化した行動の型であり、そこには感情と行為が含まれる」(Sontag 2013:29)。

ソントグにとつての道徳がアリストテレス的な徳の倫理学の枠内にあることは明瞭に読みとることができる。ところが、ソントグは「徳」や「性格」について言及するのではなく、むしろ「感受性」に言及することによって道徳を語っている。個人を一般的な規範に従わせるようなタイプのも道徳に抵抗するには「徳」や「性格」にもまして「感受性」が重要であると考えたからであろうか。この点はじつはよく分からない。しかしながら、アリストテレスが「徳」に割り当てた機能を、ソントグが「感受性」に見出しているという点は確実である。というのも、アリストテレスにおける「徳」とは優れた「選択」をおこなう能力として重視されているのだが、ソントグはアリストテレス的な「選択」を倫理的な生を中心に置いた上で、優れた「選択」は「感受性」によってもたらされるという点を強調しているからである。そこで、「選択」との関係の中でソントグにおける「感受性」の意味を考察してみる必要がある。

2 感受性

アリストテレス的にいえば、「徳」を身につけるのは、自己の感情を制御し、よき行為を行なうためである。よき行為は一般的な規範を適用することによって達成できない。なぜなら、真によき行為とは個々の

文脈に対して適切に対応することにあるのだから。この意味で、個々の文脈でいったい何を行なうかという「選択」が重視される。「徳」とは適切な「選択」をするために必須のものなのだ。善き生はその都度の適切な「選択」の果実としてもたらされるにすぎない。

ところが、ソントグは道徳を論じるにあたって「徳」ないし「性格」について語るかわりに、もっぱら「感受性」について語る。「感受性 (sensitivity)」は倫理学の用語ではない。それはむしろ美学に固有の用語である。しかも、この用語の出自は特定できる。バウムガルテンである。バウムガルテンは美学を「感性」ないし「感受性」に関する学として規定した。美学とは「感性的認識の学 (scientia cognitionis sensitivae)」(Baumgarten 1970:1)である。この点を踏まえれば、ソントグがここで「感受性」について語るといふのは、美的経験について語るといふ意味に解することができるだろう。一見すると、ソントグはアリストテレス的な「徳」の倫理学からは遠ざかっているような印象を受ける。しかしそうではない。なぜならソントグは「選択」する能力は「感受性」によって養われると主張しているからだ。

「われわれがただ盲目的にかつ無反省に服従しているのではなく、実際に選択しているということに認めるなら、それがあつた行為を道徳的と呼ぶ要件なのだが、その場合にはわれわれの道徳的選択の能力を養い、行為への姿勢をとらせるのはまさしく感受性なのだ」(Sontag 2013:30)。

では、「感受性」を刺激し、活性化させるものは何か。いうまでもなくそれが芸術作品である。こうして、美学と倫理学のあいだには緊密な

関係があると考えられるのである。

道徳を一般的な善悪の判断ないしは一般規則にもとづく行為の問題と考えると、そこに「感受性」は関係しない。したがって、この観点に立てば、「感受性」は美学固有の領域であることになる。こうして美と倫理は分裂する。実際、道徳を一般規則にもとづく行為の問題と考えたカントにおいては、美（『判断力批判』）と倫理（『実践理性批判』）は分裂している。しかし、道徳を具体的な文脈における「選択」の問題とみなせば、美学と倫理学はかならずしも別々の領域を構成しない。これがソントグの基本的な姿勢を決定している考えであろう。

「道徳とは、行為の様式や世界のなかで存在する様式を自分自身に命ずる人間の意志が作り上げたもののひとつであるという理解に立てば、行為を目指す意識の形態すなわち道徳と、意識の涵養すなわち美的経験とのあいだに根本的な敵対関係が存在しないことは明らかである」（Sontag 2013:30）。

このように、ソントグが「感受性」に注目したのは、それが一般的規則あるいは概念の適用によってはとらえきれない複雑な現実をカバーする能力であると考えられるからである。美的経験が倫理的生に重要な影響を及ぼすというソントグの主張の背後には、一般規則ないし規範によって人間の生を規制するような道徳への抵抗があるわけである。それなら、美的経験において「感受性」がとらえるものは、一般的なものではなく個別的なものであるということになるのではないだろうか。これまでの議論の流れからすれば当然そのようになるはずである。まさしく

ソントグ自身がこの点を主張している。

「芸術作品がしていることは、われわれに判断させ、一般化させることではなく、個別的なものを見させ、理解させることなのだ」（Sontag 2013:4）。

ところで、ソントグの考えによれば、美的経験は存在次元の変更に関わっている。美的経験は人間に対してこれまでとは異なった存在の仕方を教えるものとしてとらえられているのだ。すなわち、一般的なものあるいは概念にもとづいて世界を見ようとする存在の仕方とは異なった、個別的なものとして世界を見ようとする存在の仕方が美的経験からもたらされると考えられているのである。このような意味において、美的経験とは世界に対する見方を人間の存在次元から根本的に変えてしまうようなものなのだ。しかも、このような存在次元の差異は、一般的な規則にもとづく道徳と人間を優れたものにする道徳のあいだの差異そのものである。そこで、以下ではこの差異についてさらに掘り下げて考察してみなければならないであろう。

3 世界

ある行為を正当に評価し、それが善いものか悪いものかを判定するには、それと同種の行為がなされた場合と同じ基準で評価がなされなければならぬ。しかし、そのためにはそれを一般化して認識する必要がある。言い換えれば、概念をとおして認識する必要がある。日常生活はこ

のような判断によって成立しているのだ。これに対して、芸術作品の意義はこのような日常生活の次元とは異なった次元に人間を立たせる点にあると考えられる。ソントグによれば、芸術作品は人間を「世界から切り離す」(Sontag 201333) のだ。人間の「感受性」が活性化されるのはこの次元においてである。すでに述べたように、この「感受性」が「選択」する能力を養うと考えられる。このような意味で、人間を「世界から切り離す」ことは人間を「世界に連れ戻す」(Sontag 201333) ことになる。芸術作品は、一般的な規則にもとづいて道徳的な判断がなされる世界から人間を「切り離す」ことによって、状況に即した「選択」が意味を持つような世界へと人間を「連れ戻す」という意味であろう。この論点をさらに敷衍してみよう。

善悪の判断はつねに正当であることが要求される。この点を担保するには一般的な規則が判断基準として不可欠なのだ。しかし、善悪の判断基準は社会によって異なるということがありうるだろう。もしそれが事実なら、複数の判断基準が存在することになるだろう。ということは、複数の道徳が存在する可能性があるのだ。ソントグによれば、どの道徳にも「その道徳に限定された社会的利益と階級的価値にすぎない要素」(Sontag 201330) が付着している。道徳は利益に還元されるのだ。芸術作品は、そのような利益にまみれた世界から人間を「切り離す」。その上で、人間をふたたび「世界に連れ戻す」のだ。しかし、その世界はもとの世界ではない。美的経験において人間は個別的なものに触れているからだ。このような存在次元の変更によって、善悪に関する一般的な判断ではなく、個々の文脈に応じた「選択」が可能になるのである。

このようなソントグの存在論がプラトンの二元論に対立するという点

に注意すべきだろう。すなわち、感覚的な「世界から切り離」されて善の「アイデア」を観照した後、ふたたび「世界に連れ戻」された人間こそ個別的な存在の善について真の認識を持ちうるということが主張されているのではない。むしろ、感覚的な世界を超越するもうひとつの世界の存在を承認しないという存在論がソントグの立場である。ソントグにとって、存在次元の変更は感覚的な世界のなかで遂行されるものなのだ。この点は次の引用のなかに明瞭に読みとることができる。

「芸術において世界を克服することあるいは超越することは、世界と出会う方法であり、世界のなかに存在しようとする意志を鍛錬し陶冶する方法でもある」(Sontag 201335)。

すでに言及したフレーズとは若干言葉遣いがかわっている。「世界から切り離す」が「世界を克服あるいは超越する」と言い換えられ、また「世界に連れ戻す」が「世界と出会う」と言い換えられている。重要な点は、「世界を克服あるいは超越する」ことがそのまま「世界と出会う方法」であると明言されているという点だ。存在次元の変更は感覚的な世界のなかでの態度の変更として遂行されるのである。「世界を超越」するということが、別の世界を要求するわけではないのだ。それはむしろ「世界のなかに存在しようとする意志を鍛錬し陶冶する」ことなのである。この引用に含まれる「意志」という言葉に注目すべきである。「意志」はこの文脈では「概念」に対立するからだ。すなわち、「概念」という一般的なものに対し、芸術作品が表現する個別的なものに感応するはたらきが「意志」と呼ばれているのだ。以上の考察から重要な点が確認できる。

善悪の判断がなされる存在次元とは別の存在次元を同じ世界のなかに確保することがソングの課題であり、その課題を追求するための手がかりとして芸術作品における個性の経験が着目されたのである。

ところで、ソングの考えによれば、芸術作品のなかの個別的なものは「内容」ではなく「形式」である。したがって、「感受性」が関わるのは「内容」ではなく「形式」であることになる。この考えは芸術作品に関する伝統的な見方とは正反対のものである。プラトンの「ミメーシス」にはじまる見方からすれば、「内容」は個別的であり「形式」は一般的である。この見方は現代においても依然として踏襲されている。「芸術作品とはその内容そのものである」(Sontag 2013:11)と考えられているからだ。ところが、ソングはこの考えが誤りであると断固として主張している。ソングの批評の意義は、芸術作品に関する伝統的な見方を否定して「形式」が個別的であることを執拗に示した点にある。「感受性」が芸術作品の「形式」という個別的なものに関わるからこそ、それは美と倫理を結びつけるのだ。このように、美と倫理に関するソングの考察は芸術作品の「内容」と「形式」に関する考察から導かれている。しかも、「内容」と「形式」に関するソングの考えは、その批評のスタイルと緊密に結びついていると考えられる。したがって、「内容」と「形式」に関するソングの議論を考察することによって、美と倫理に関するソングの主張が、「反解釈」という批評のスタイルそのものからの帰結であるという点を示すことができるはずである。そこで次に、ソングの「形式 (style)」に関する議論を再構成し、これまでの解釈の中にその論理を位置づけてみなければならぬであろう。

4 形式

いかなる意味においても個性が一般化されることはありえない。ところが、あらゆる判断は一般化を前提している。したがって、芸術作品について判断するということは、本来はありえない。

「われわれは一般化しなければ(道徳的、概念的に)判断することができないということが真であるとすれば、その限りにおいて芸術作品の経験および芸術作品において表象されているものが判断を越えているということもまた真である」(Sontag 2013:34)。

しかし、現実には芸術作品はしばしば一般化されて語られる。そのとき、芸術作品は道徳的な判断の対象になるだろう。道徳的な判断とは、例えばシェイクスピアの戯曲の作品としての善し悪しを述べることでない。むしろ、そこに描かれている人物や行為そのものを道徳的に判断するということの意味している。つまり、一般化されるのは「内容」である。しかし、「内容」について道徳的な判断を下すことは、芸術作品の経験とは何の関係もないはずである。実際、マクベス夫人の行為を道徳的に非難することはいったい何の意味があるだろうか。むしろ、ソングのいうように、真の芸術作品は「われわれの卑小な判断、人物や行為に対して善いか悪いかという安易なレッテルを貼ることを無効にする」(Sontag 2013:34)のではないだろうか。無論、『マクベス』で描かれている「内容」と同じことが日常生活で起こったら非難されるだろう。しかし、それを基準に芸術作品に対する判断を下すとすれば、芸術作品

を日常生活の次元に引き下げることになるだろう。それは善悪の概念および行為の規範という一般性が支配する存在次元にほかならない。

このように、芸術作品の存在そのものである個性は「内容」のなかには見出されない。それどころか、「内容」という側面から芸術作品に接近することによってその個性はむしろ損なわれる。ソントグが芸術作品の「形式」ないし「様式」に着目するのはこのためである。

「芸術をとおしてわれわれが手に入れる知識は、(事実とか道徳的判断のような)何かについての知識というよりも、何かを知ることの形式あるいは様式の経験という知識なのだ」(Sontag 2013:27)。

とはいえ、芸術作品を論じる際に、その「内容」に言及することは避けられない。いや、「内容」に言及せずに芸術作品を論じることなど無意味である。その点はソントグも承知している。「内容」が一般化され、芸術作品が概念的に語られることをソントグは警戒しているのだ。では、一般化をともなわずに「内容」に言及するにはどうすればよいのだろうか。ソントグはそれについて次のように述べている。

「最良の批評とは、まれにしか存在しないが、内容についての考察を形式についての考察にとけ込ませるような類いのものである」(Sontag 2013:18)。

では、「形式」とはいったいどのようなものを指しているのだろうか。これまでの論理の流れにしたがえば、このような問いが出てくるのは当

然である。ところが、ソントグはこの問いかけに答えようとしていない。しかし、それでかまわないのだ。というのも、「形式」とは個性を表現するものだから、作品の数だけ「形式」ないし「様式」があることになるからだ。

「様式とは芸術作品における意志決定の原理であり、芸術家の意志の署名である。そして人間の意志は無数の姿勢をとることができるのだから、芸術作品には無数のスタイルがありうる」(Sontag 2013:37)。

そうであるとすれば、美術史で普通におこなわれているように、様々な芸術作品をひとつの様式に包摂することなど本当はできないのだ。

「様式という概念を歴史的に用いて、芸術作品を様々な流派や時代に分類すると、われわれは様式の個性を消去してしまうことになる」(Sontag 2013:33)。

それだけではない。ひとつの様式を設定したとたん、様式は個々の作品を評価する規範として機能してしまうだろう。人間の行為を評価する道徳的概念のように。では、どうすべきなのだろう。批評は個々の作品について語るほかない。はじめに引用したテキストはまさにこのことを述べていたのである。そのテキストが主張していたことは、芸術作品は「規範的語彙」で語られるべきではなく、むしろ作品が何であるかという観点から「記述的語彙」で語られなければならないということなのであった。このように考えれば、芸術先品の本質である個性をいわば蝶

番として用いることによって美と倫理を結びつけるソントグの論理は、批評とは個別的なものの存在を記述する行為であるという「反解釈」としての批評のスタイルからの帰結として理解することができる。それから、批評という行為が倫理的な行為ということにならないだろうか。いや、厳密に言えば、批評とは少なくともソントグにとっては「道徳的な人物になろうという取り組み」なのではないだろうか。この点を結論として以上の考察をまとめることにしよう。

おわりに

はじめに述べたように、ソントグの批評のスタイルは芸術作品の意味を明らかにするというスタイルではない。むしろ芸術作品の存在そのものを語るものである。同じテキストをもういちど引用しよう。

「批評の機能は作品が何を意味するかを示すことではなく、作品が作品であるのはいかにしてなのかを示すことであり、さらにいえば作品が作品であることを示すことにある」(Sontag 2013:20)。

ソントグの考えによれば、批評は「作品が作品であること」を語らなければならぬ。それは「形式」ないし「様式」について語るといふことを意味している。「究極的に分析すれば、芸術とは『様式』にはかならぬ」(Sontag 2013:35)と考えられるからだ。これに対し、「作品が何を意味するか」を語るには「内容」について語らなければならない。

しかし、「内容」について語ることは概念という一般的なものについて語ることに帰着する。それでは「作品が作品であること」を示すことにはならないのだ。

ソントグは、一般化する概念的思考とはまったく異なる「感受性」の作用にもとづいて、美的経験が倫理とつながっている点を強調している。この主張が上記の「内容」と「形式」に関する議論の延長線上にあることは明らかである。このような観点から倫理を語ることによって、ソントグは規範にもとづくタイプの倫理を暗黙に退け、個々の文脈における適切な「選択」を優先させるタイプの倫理を擁護しているのだ。

まとめよう。「形式」について語ることは美的な領域でなされるが、ソントグにとってそれは倫理的な領域につながっている。われわれは、このような論理がソントグの批評のスタイルそのものから帰結していると考えることができる。ということは、ソントグにとっては、批評という行為がそれ自体がはじめから倫理的なものとしてとらえられていたということになるのではないだろうか。「私が書くひとつの理由は自分を変えるため」(Sontag 2014:123)とソントグがいうのはおそらくこの意味においてなのだ。「反解釈」という、ある意味では社会通念に背を向けた批評のスタイルは、ソントグにとつてきわめて倫理的な実践として認識されていたのである。

文献

- Anscombe, G.E.M. 1958, "Modern Moral Philosophy," *Philosophy* 33(124), 1-19
Baumgarten, A.G. 1970, *Aesthetica*, Olms

Sontag, Susan 2013, *Essays of The 1960s & 1970s*, David Rieff (Ed.), The Library of America

Sontag, Susan 2014, *The Complete Rolling Stone Interview by Jonathan Cott*, Yale UP

Sontag, Susan 2018, *Stories*, Benjamin Taylor (Ed.), Penguin